

野鳥たより

—北海道—

第47号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和57年3月21日



コクガン 上磯町茂辺地 1982. 1. 撮影 長尾 康



もくじ

- 探鳥地案内(浜頓別周辺) 2
- 羽幌町周辺の野鳥.....小山哲生..... 3
- 6年目を迎えた大沼のコブハクチョウ...隅田重義・吉沢貞一..... 7
- 探鳥会報告.....野幌・ウトナイ湖・小樽港・藤の沢..... 9
- 新年懇談会報告.....11
- 探鳥会案内.....12
- 鳥民だより.....12
- 編集後記.....12

浜頓別周辺

探鳥地案内

◆位置 浜頓別町及び猿払村

◆概況 道北浜頓別周辺には、浜頓別駅の北1.5km程のところ、白鳥の湖として有名なクッチャロ湖、そして約3kmのところ、皆さんご存知のベニヤ原生花園、さらに猿払村にかけてポン沼、モケウニ沼、ポロ沼等7つの沼が散在しており、山軽の環境庁鳥類一級観測ステーションの存在が示すとおり北方系鳥類の宝庫と言われているところ。その種類もさることながら、個体数が多いことが一つの特徴と言えます。

◆探鳥コース

1. ベニヤ原生花園

低地においては、我国で唯一というポドゾル土壌の珍しい地質のところ、6月から7月中旬にかけての繁殖期には北海道の代表的な美しい草原性の鳥シマアオジをはじめ、オオジュリン、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ等、1978年の繁殖調査時には、20種類記録されました。特に朝モヤの中でのシマアオジのあの哀愁を帯びた鳴声には心ひかれます。それから、エゾカンゾウの群落から悠然と現われたエゾシカの雄を未だに鮮やかに思い出します。

2. クッチャロ湖

ここはコハクチョウの湖として有名どころですが、11月～12月中旬、3月下旬～4月には他にヒドリガモ、スズガモ、キンクロハジロ、ヨシガモ、オナガガモ、マガモ、コガモ、ホオジロガモ、ホシハジロ等のカモ類をはじめ、オジロワン、オオワシ、カワアイサがよく見られ、ミコアイサ、ハンビロガ

⑰

モも入るようです。この白鳥も餌付けされ大事にされているようですが、餌付けに疑問を持つものとして、何かスッキリしないのは私だけの感情でしょうか、まあ、鳥にとっては人間に感心をもたれない方が、かえって幸せなのかと思いますが、環境がどんどん悪くなっていくのは、やりきれない気がします。

3. ポン沼等の小沼群

ここではポン沼のアカエリカイツブリの繁殖とポロ沼のシギ類とヒシクイ、マガンが特記されます。以上、とりとめもなく書いてきましたが、ここ浜頓別も周囲の環境は草地造成等でかなり破壊されてきています。

何とか鳥達と仲良く共存していきたいものです。それが人間のためにも良いことなのでから。



☎098-57 枝幸郡浜頓別町字日の出 岸 則男
電話 01634 (2) 2836

☆岸氏は、浜頓別町クッチャロ湖畔で、民宿「トシカの宿」を営んでおりますので、ご参考までにお知らせいたします。
(編集委員会)

羽幌町周辺の野鳥

小山哲生

新卒で市街地から30 km もはいった、山奥の小さな小学校に勤務した10数年前、「これ、なんていうの?」と4年生の子供から示された鳥は、今おもえば紛れもなくミヤマカケスだった。しかし、そのころの小学校にある鳥の図鑑といえば、「日本の鳥図鑑」であって「北海道の鳥図鑑」ではなかった。汗をふきふき、やっと私がさがしみつけたカケスの絵をみて、子供は「頭のところがちがう」と言う。なるほどそのとおりだ。返答に窮した私のようにすをあわれんで彼は言った。「これはきっと、カケスのめすだよ」と。私は彼の自然に対する洞察力のすばらしさを讃え、新しい知識の習得を、ともによるこびがあった。翌朝、彼から「毛をむしって、フライパンで焼いて喰ったら、うまかった。骨はかたかったけど…」と報告をうけた。その数日後の夕方、2 km の山道をかけて彼がやってきた。「うまいぞ。いまやいたばかりだよ」玄関先の彼は、風呂あがりのように、丸い頭から湯気をあげていたが、カケスのめすは、冷えきって

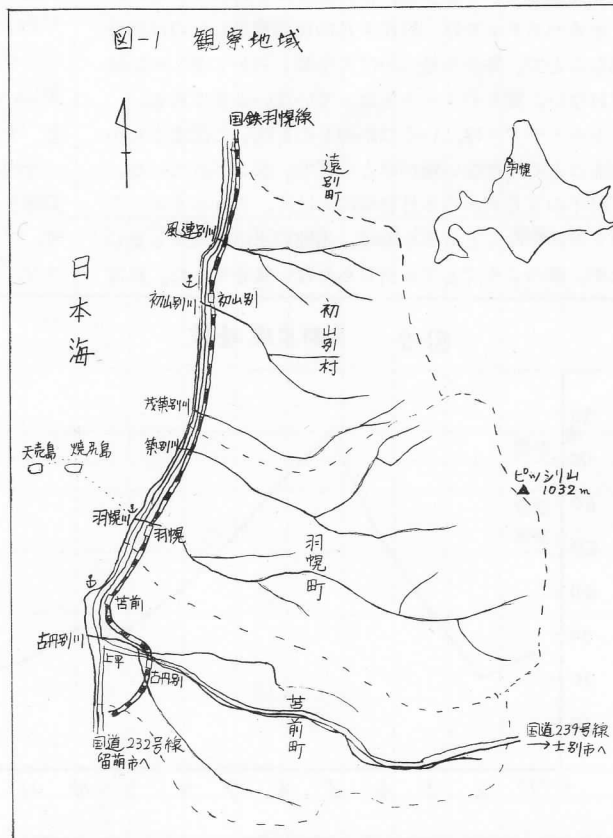
り、農業と漁業を基盤産業とする人口約1万3千人、総面積477km²の町である。(図-1)

日本海を北上する対馬海流の影響で、緯度のわりには冬期間もさほどの寒さを感じない(年平均気温7度)積雪は海岸線であるため、多いとは言えない。しかし、冬の季節風は、海を荒れくるう白い波の牙と化し、地吹雪で視界ゼロの日が、何日も続く土地である。

総面積の80%以上は山地であるが、伐採が進行し原始の姿をとどめているとはいいがたく、海岸はほとんど牧草地と言ってよい。天塩山地をみなもとに、河川の水量は比較的豊かであるが、天売島のようなすぐれた探鳥地は少ない。

したがって今回の報告は、羽幌町を中心にしながらほとんど同一条件下である隣接する苫前町と初山別村の記録を含めたものとした。また、天売・焼尻両島については、交通の便が悪く、継続的な観察記録といえないの

図-1 観察地域



いた。
まだ口にはおぼらないうちから、彼があまりにも「うまいべ。うまいべ」と言うものだから、その時は本当に「うまい」と思った。

そんなことがあってから、カケスのめすだけは野外ではじめて他の野鳥と区別できる鳥となった。しかし、しばらくの間は、「それにしてもめすばかり。ここにおすはいないのだろうか」と思ったりしていたものだった。

翌月の給料日に市街地へ、しょうゆつぎと注文しておいた鳥の図鑑(小林桂助著)を買いに行った。

それ以来、生活する土地が変わっても、野鳥観察を続けてまいりました。でも、野鳥識別の力は、その当時とくらべて、さほど上達していないみたいです。

本会より「道北地方の日本海側には、野鳥観察の記録があまり発表されていないので、今までのをまとめて送って欲しい」とのことなので、観察記録としての不十分さを感じとまどいましたが、以下報告いたします。

1. 観察地域・期間・方法

羽幌町は、留萌地方のほぼ中央に位置し、日本海に浮かぶ天売・焼尻島への玄関口であ

でこのリストから除外した。

期間は、1978年1月から'81年12月までの4年間に限定し、それ以前の記録については、参考までに後記2の②で種名のみ列記した。また、識別に自信のないもの（センニュウ・ムシクイなど）は、記載しなかった。同じ意味で、コガラ・ハシブトガラは、すべてハシブトガラとして扱った。繁殖については、直接巣をみつけたか、巣立ち直後のひなの確認以外は、一切記載しなかった。

観察は、不定期ではあるが、休日、早朝、通勤時、勤務時間（教室の窓から）等、あらゆる機会をとおして行った。

8倍の双眼鏡と、1,000ミリの望遠レンズを望遠鏡がわりに使用しているが、肉眼でのんびり楽しむやり方が自分には一番むいているようである。

2. 観察の結果から

① 記録された野鳥

4年間に記録された野鳥は、38科123種であった。広い観察地のわりには、少ないようにも思う。

月別にみると（図-2）、5月に全種の6割をこす74種が顔をみせ、それ以降は減少の一途をたどり、2月には20種そこそこになってしまふ。秋の渡りの時期に少ないのは、シギ・チドリの飛来に適した干潟が当地にはなくまた、ガンカモたちも、ハンターの目をさけて秘密の地下道を通り抜けていくようで、秋の記録はきわめて少ない。

オオハクチョウは、'81年4月に18羽飛来したのは例外的なことで、冬から春にかけて年間1羽か2羽しか記録されない。渡りのコースとなっていないようである。

シギ・チドリは、いくつかのものを除いて図鑑でしか知ることのできない種がほとんどで、恋こがれている。

'81年の5月末から6月初旬にかけて、アカエリヒレアシギが少なくとも300羽は、当地の水田に飛来しましたが、夢のようでとても信じられない気分でした。異常

気象は、鳥キチにとって時にはうれいこともあるようです。しかしこの年の異常寒波は、繁殖のためにすでにやってきていた野鳥にとって、かなりのダメージがあったようで、衰弱して死んだと思われる鳥が、子供たちによって多数持ち込まれた。また、毎年ヨシやイタドリなどの群生地ですりすまの多いオオヨシキリは、それらの植物の成育がおくれたためか、この年クマザサを利用していることが目立った。

ワン・タカは、トビが通年記録されるほかは、少なく、オジロワンが3月に1羽か2羽、上空通過することがあるぐらいだ。'80年の真夏に、とても信じられないがオジロワンが1羽低空を通過したので、リストに加えた（これはカケスのめすではない。）

クマゲラについて、山間地で見たとという情報がたまにあるが、私は一度も見ていない。

ツバメの繁殖は、札幌が北限であるとされてきたが、昨年の夏、私は苫前町旭地区の牛舎で、ツバメが2回にわたって巣作り子育てをし、無事巣立ったことを観察確認できた。家人の話によると、少なくとも5～6年前から毎年やってきて、巣立ちを成功させているとのことでした。

古丹別川の河口から、上平沼（通称田淵の沼）の周囲にかけては、この地方では一番よい探鳥地であると思う。水辺や草原の鳥を多数観察することが出来る。また、すぐそばの上平海水浴場の崖に（地上約10m）、ショウドウツバメのコロニーがあり、西陽をうけて乱舞する姿は美しい。

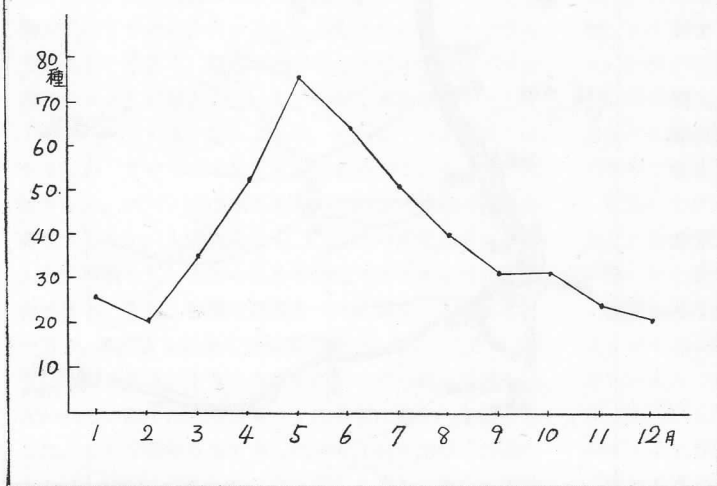
② それ以前の記録から

今回の野鳥リストに加えなかった、'78年以前の野鳥の記録として、次の17種を参考のために記載しておきます。アトリ、チゴハヤブサ、マミチャジナイ、マミジロ、ウソ、ルリビタキ、タンギ、クイナ、ギンザンマシコ、ヒレンジャク、アマツバメ、ジョウビタキ、クロジ、サメビタキ、エゾビタキ、メジロ、アオバズク、カモメ、アジサシ、フクロウ

3. まとめ

田舎には、多くの野鳥が生息していると思われがちであるが、美しい自然も、そこで生活している人間にとって、地域の産業発展をさまたげる要因として映ったり、開発すべき対象と考えられることが多い。事実、豊かであるべき自然が、ゴルフ場や共同墓地、自然公園という名で呼ばれる人工的な公園計画、大規模な牧草地化、大小の河川改修など、当地でも年々小さな生物が生息する土地が、せばめられてお

図-2 月別出現種数



ります。

自然と人間、そして地域の産業活動を、対立的宿命的にとらえることは、そのいずれをも不幸にさせることだが、鳥と人間の住んでいるこの地域で、今後も野鳥観察を続け、共存できる社会を考えたい。

この地で、野鳥観察をしている人は非常に少ないが、今後、仲間づくりに力を入れ、1人でも多くの人によって、よりたしかな基礎資料としての野鳥リストの作成と地域への確かな働きかけを進めていきたいです。

羽幌町周辺の野鳥リスト (1978.1~1981.12)

○ 観察

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ウミウ科	ウミウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
サギ科	チュウサギ					○								'81のみ
	アオサギ					○								
ガンカモ科	マガン				○									
	オオハクチョウ	○			○									
	オシドリ				○	○	○	○						
	マガモ				○	○	○	○						繁殖
	カルガモ				○	○	○	○						
	コガモ				○	○	○	○						
	トモエガモ				○	○	○	○						
	ヨシガモ				○	○	○	○						
	ヒドリガモ				○	○	○	○						
	オナガガモ				○	○	○	○						繁殖
	シマアジ				○	○	○	○	○	○				
	ハシビロガモ				○	○	○	○						
	キンクロハジロ	○	○			○							○	
	スズガモ	○	○			○							○	
	クロガモ	○	○	○	○	○							○	
ビロードキンクロ	○		○									○		
シノリガモ	○			○								○		
コオリガモ	○	○	○									○		
ホオジロガモ	○		○									○		
ウミアイサ	○	○	○	○	○							○		
カワアイサ				○										
ワシタカ科	トビ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	繁殖
	オジロワシ			○										
	オオワシ								○					'80のみ
	オオタカ				○	○								
ノスリ	ノスリ				○	○								
					○	○								
ハヤブサ科	シロハヤブサ			○										
	コチョウゲンボウ			○										
ライチョウ科	エゾライチョウ						○	○						繁殖
キジ科	コウライキジ						○							
クイナ科	ヒクイナ						○							繁殖
	バン						○	○						繁殖
チドリ科	コチドリ				○	○								
	イカルチドリ								○					
シギ科	アカアシシギ					○								
	タカブシギ					○	○							
	イソシギ				○	○	○	○	○					
	チュウシャクシギ									○				
	オオジシギ				○	○	○	○						
ヒレアシギ科	アカエリヒレアシギ					○	○						'81のみ	
カモメ科	ユリカモメ				○	○								
	セグロカモメ	○	○	○	○				○	○	○	○	○	

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
カモメ科	オオセグロカモメ	○	○	○	○					○	○	○	○	
	ワシカモメ		○	○	○									
	シロカモメ	○	○	○	○						○	○	○	
	ウミミネコ ミツユビカモメ			○	○	○	○	○	○	○	○	○		
ウミスズメ科	ウミガラス マダラウミスズメ	○											○	
	ウミスズメ	○				○							○	
ハト科	キジバト				○	○	○	○	○	○	○	○		繁殖
	アオバト						○	○	○	○	○			繁殖
ホトトギス科	カッコウ					○	○	○	○					繁殖
	ツツドリ					○	○	○	○					
	ホトトギス						○							
フクロウ科	オオコノハズク					○								
ヨタカ科	ヨタカ									○				
アマツバメ科	ハリオアマツバメ					○	○	○	○	○				
カワセミ科	アカショウビン					○	○	○	○					
	カワセミ					○	○	○	○					
キツキ科	ヤマゲラ	○	○		○	○	○		○		○	○	○	繁殖
	エゾアカゲラ	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
	エゾオオアカゲラ コゲラ	○			○	○	○					○		
ヒバリ科	ヒバリ			○	○	○	○	○	○	○				繁殖
ツバメ科	ショウドウツバメ					○	○	○	○					繁殖
	ツバメ					○	○	○	○	○	○			繁殖
	イワツバメ					○	○	○	○	○	○			繁殖
セキレイ科	キセキレイ				○	○	○	○		○				繁殖
	ハクセキレイ			○	○	○	○	○	○	○	○	○		繁殖
	セグロセキレイ			○		○	○	○						
	ピンズイ タヒバリ			○	○									
ヒヨドリ科	ヒヨドリ				○		○	○						
モズ科	モズ				○	○	○	○	○	○	○			繁殖
	アカモズ						○	○	○	○				繁殖
	オオモズ			○	○									
レンジャク科	キレンジャク				○						○	○		
カワガラス科	カワガラス					○		○	○	○				
ミソサザイ科	ミソサザイ										○			
ヒタキ科	ノビタキ				○	○	○	○	○	○				繁殖
	イソヒヨドリ					○								'78のみ
	トラツグミ										○			
	クロツグミ				○	○	○	○						
	アカハラ			○	○	○	○							
	シロハラ			○	○	○	○							
	ツグミ	○		○	○	○					○	○		
	ヤブサメ						○							繁殖
	ウグイス				○	○	○	○	○					
	エゾセンニュウ						○				○			
	コヨシキリ						○	○	○					繁殖
オオヨシキリ					○	○	○	○					繁殖	
クイタダキ		○												
キビタキ					○	○	○							
コサメビタキ								○						
エナガ科	シマエナガ						○				○			

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
シジュウカラ科	ハシブトガラ	○		○	○				○	○		○		
	ヒガラ					○								
	シジュウカラ		○	○	○			○	○	○	○	○		
ゴジュウカラ科	シロハラゴジュウカラ			○	○	○						○		
キバシリ科	キバシリ					○								
ホオジロ科	ホオジロ				○	○	○	○	○	○				繁殖
	コジュリン						○	○	○	○				繁殖
	ホオアカ					○	○	○	○					繁殖
	シマアオジ					○	○	○	○	○				繁殖
	アオジ				○	○	○	○	○	○	○			繁殖
	オオジュリン					○	○	○	○					繁殖
ユキホオジロ		○	○										'79のみ	
アトリ科	カワラヒワ				○	○	○	○	○	○	○			
	ベニマシコ					○								
	イカル						○							
	シメ					○	○							
ハタオリドリ科	ニューナイスズメ					○	○	○	○					
	スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	繁殖
ムクドリ科	コムクドリ					○	○	○	○					繁殖
	ムクドリ		○	○	○	○	○	○	○	○				繁殖
カラス科	ミヤマカケス	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	
	ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	繁殖
	ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	繁殖
	ワタリガラス									○	○	○	○	

☎078-41 苫前郡羽幌町南2条4丁目

6年目を迎えた大沼のコブハクチョウ

隅田重義・吉沢貞一

◆概況

昭和50年IBM社から2羽のコブハクチョウの寄贈を受けた七飯町が大沼に放鳥、この2羽から翌年8羽のヒナが生れたがこのうちの7羽が大沼を抜け出して道東をはじめあちこちの湖沼に美しい優雅な姿を見せて落着いているようだ。継続観察をつづけて6年目、昨年は7ヶ所に巣をつくり、いよいよ数を増している。本道では原産地である大沼のコブハクチョウについて営巣から抱卵、育雛、成鳥までの生態を写真と記録によって紹介したい。望遠カメラ、8ミリ、双眼鏡カメラを使用した。はっきりしない点もあるが、写真と記録の双方から読み取ってもらえれば幸甚である。

◆コブハクチョウの営巣地

1. 小沼(周囲16キロ)
 - 発電所水とり川の両岸に1巣づつ(船でなければ見られない)
 - ユースホテル沖、1巣 計3巣
2. 大沼(周囲24キロ)

- 旧養魚池、1巣。
- 地獄湾、1巣。
- 研修所西湾、1巣。
- 研修所東小島、1巣 計4巣。

56年度合計・7巣発見。

◆巣づくり

今年は4月になっても吹雪いて観察の度、風は身にしみたが勇んで足を運ぶ。漸く氷開く。4月9日、オオハクチョウ1羽もなし、カモの群れもなし、僅かに岸に散在、ワンも1羽ヨットハウス沖に1羽、岩礁の上に。登山口方向沖に、らしきもの1羽。大沼はガラあきの状態になり、うるさいもの危険なものもなくなってはじめて巣づくりにかかったのではないと思われる。

大沼小沼とも曲折多く大小の島々点在、水浅く巣づくりにエとなる水藻も多いので環境はすばらしい。新しい巣づくりには1ヶ月位、古い巣は修理程度で枯れ草やヨシ、一生けんめいになったり遊んだりして日数がかさむ。

- ユースホテル沖の巣

5月10日初見、24日まで何度も行く。●地獄湾の巣、5月10日初見、5月24日まだ生れていない。(抱卵中)

5月31日まだ生れていない。



写真1 抱卵中 56.5.31 大沼地獄湾

◆抱卵と育雛……成鳥へ

●6月3日、地獄湾ヒナ6羽巢の下で泳いでいた。親は、まだ生れていない卵を温めている。ヒナのそばでオス警戒遊泳〔写真2〕



写真2 育雛(6羽生まれたがまだ抱卵中)
56.6.3 大沼地獄湾

●研修所西湾、5月31日ヒナ8羽をつれて両親でエ(水藻)を与えていた。(撮影)

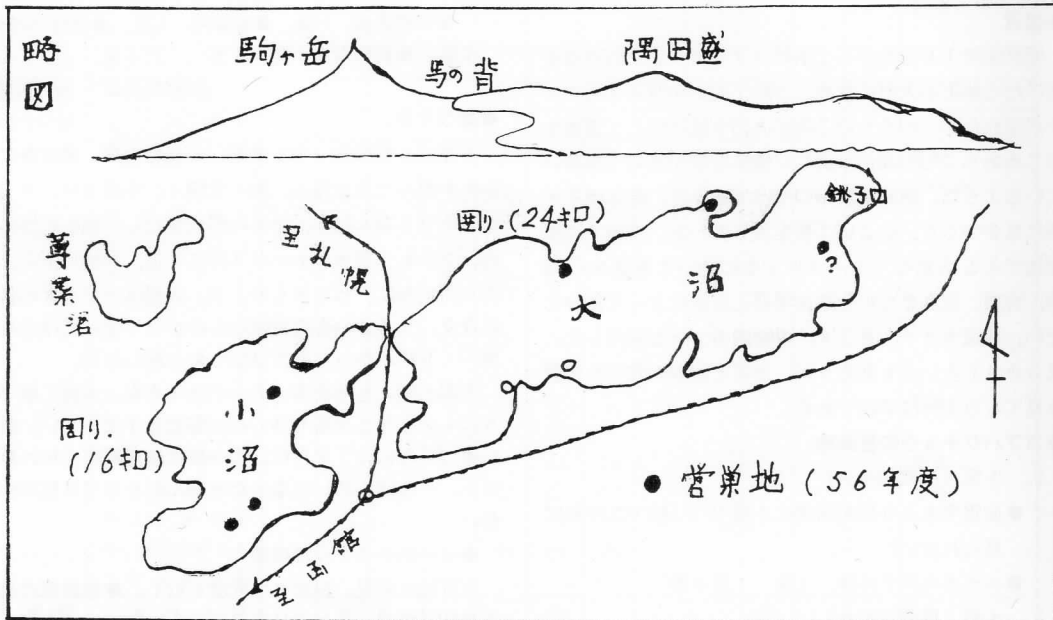
●研修所東小島、5月24日初見。6月13日—2、3日前に生れたと思われるヒナ8羽を両親がつれてエを与えていたが、水藻を底から嘴ではさみ水面にあげてそれをバラバラにしては与える。先をあらそってはたべる。(この仕ぐさを8ミリで長く撮影)〔写真3〕



写真3 育雛 56.6.13 大沼銚子口

●旧養魚池、5月10日初見、5月24日まだ生れていない。6月19日まだ。7月4日生れたばかりのヒナ3羽をつれて両親が泳いでいた(8ミリ撮影)。このヒナはあまり長かったので、何か異常でもあったのではないかと思うが(或は無精卵か)ドロが深く近づけない。そのうち草も高くのび双眼鏡もきかなくなった。さてさて生れて間もないヒナをどこに連れて行って育てるのか、どこの巢のものか、一時行方不明になる。船で草の根を分けてさがすより他ないと思う。

●東大沼のヒナ5羽……これは地獄湾から来たものか、他の巢から来たものか不明、地獄湾から来たとも思



われるが羽数が合わない。先に生れた6羽このうち1羽がカラスか何かにやられたか、それとも後で何羽か生れているはずだから数はもっと多くなっているはずとも思うが、やはり研究や観察が不足と思う。今年のヒナ確認は37羽だが小沼の3巣は船でなければと思ったが驚かすこともないのでそのままにしたが、親子とも51羽になる。まだ育てるとは思う。

◆苦勞も忘れて（成鳥へ）

親はまっ白、白になりかけている子、黒半分のが1羽、やがて白に変る。親子水いらずでのんびりと昼さがりのひとときの姿を発見し、その美しい光景に心深くうたれた。何ものも忘れて見入った。観察をひたすらに続けて5ヶ月間の苦勞もどこへやらであった。〔写真4〕

いつの日にか親と離れて旅立つ日がくるであろうこのひととき、親子を讃える歌声が風光美しい大沼いっばいに奏でられているように思われて去りかねた。この写真と8ミリをコブハクチョウのために残したい。

なんというすばらしい光景であろうか。
なんという生の美しい喜びであろうか。

◆むすび

大沼は明治38年に北海道立公園に指定され昭和33年に

道南唯一の国定公園に指定され、その美しい日本のな景観は新日本三景の一つとして見直されつつある。渡り鳥の要地としてワシ類、ハクチョウ類、各種のカモの大群が見られる。人工の加わらないこのすばらしい大自然をいつまでも道民の大切な聖域として護りたいと願うものである。

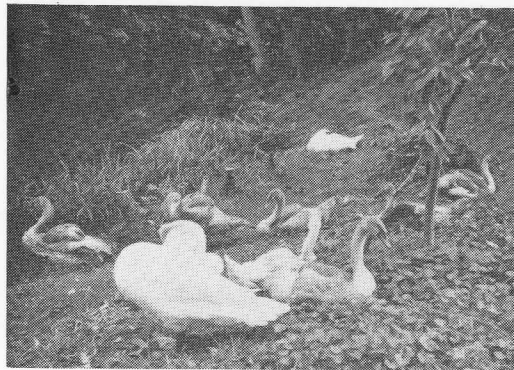


写真4 成鳥近し（生後3ヶ月で親位になる。一家だんらんのひととき） 56.8.6 大沼公園事務所裏
隅田重義 ☎040 函館市八幡町13-16
吉沢貞一 ☎040 函館市万代町7-24



野 幌

56.10.25 8:30~14:00 高 嶋 早 苗

鳥が見たくて、鳥を知りたくて、鳥を追ってみたいたくて参加させていただいた。鳴き声に耳をすませ、目を凝らす、なかなか姿が見えない、早く見

つけたい。早くとらえたいと頭の中でうずまいている。やっと視角に入った！“ハシブトガラ”くんは黒っぽい帽子をかぶり、木々を飛びまわり、見ているつもりが見られていたのか、新米の私にも姿を現わしてくれた。

もっといいことが……“オオアカゲラ”は今まで見た写真よりずっときれいなピンク地の胸が鮮やかでした。さらに“ヤマゲラ”が私の前に堂々と姿を現わし、枯れ木のとっぺんに陣どり、しばらくの間、見つめることができました。ずっと見上げていたので首がいたくなっただけで飛び立つまで見つめられ、満足感を味わいました。どちらかというとまだまだ視角に入らない鳥が多いのです

が耳を澄まし、森林を歩くのが何となく楽しくなりました。今度はどんな鳥に出会えるかな……。

〔記録された鳥〕 コガモ トビ ハイタカ キジバト ヤマゲラ アカゲラ オオアカゲラ コゲラ ヒヨドリ ルリビタキ ツグミ キクイタダキ エナガ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ ゴジュウカラ キバシリ メジロ カシラダカ アオジ クロジ カワラヒワ イカル シメ スズメ ムクドリ カケス ハシボソガラス ハシブトガラス カモ S.P. (32種)

〔参加者〕 後藤芳彦 横田通典 大坊幸七 北尾 諭 清水 幸・朋子 高嶋早苗 山本篤子 渡辺紀久雄 柳沢信雄・千代子 岩泉ゆう子 早瀬広司・富 野口正男 長谷川涼子 天童雅俊 長岡宏幸・範子・滋雄・ゆりこ (21名)

〔担当幹事〕 野口正男 長谷川涼子
☎061-62 石狩郡当別町末広町

ウ ト ナ イ 湖

56.11.15 10:00~13:00 山 本 篤 子

9月末の野幌での寒さに懲りてモコモコに着込んだ結果、一段と太さを増した足を力ずくでゴム長に押し込

で出かけた。あいにくの雨ですぐにネイチャー・センターに向かうことになる。初めて見るセンターは想像以上

に立派で、ボランティアの人たちが一本一本焼きあげたという焼き丸太の外観もすばらしいもの。なかも清潔で望遠鏡などの設備も整い、手作りの暖かさが感じられる展示にも好感が持てる。レンジャーの方のユーモアにとんだお話とともに見た映画やスライドも楽しかった。

鳥たちは20種ほど現われてくれたそうだが、全くの新米の私にはガンやカモは皆同じように見えてしまう。あの5つ子ちゃんが似たような服を着ているところを見わかるようなもので、違いを教わっても悲しいかな我が目にはなかなか違って見えてくれない。やっとわかったのはコハクチョウ、オナガガモ、ミコアイサとじょうずな潜りを見せてくれたウミアイサだ。スポットと潜ったままなかなか出てこない。随分息が長いんだなあとへんな感心をするが、その間もまだ出てこない。段々心配になってくる。大変だ、おぼれた!!とあせる。と、なあんだ、騒ぐことはなかった、ずっとむこうにとっくにしているとのこと。これがホントのトリ越し苦勞でした。

帰る頃には雨もあがってうっすらと虹もかかり、アカゲラ嬢やオオアカゲラ氏が登場するなか、センターをあとにした。帰りの車中での会話。ベテランのKさんと初めてのFさん。

Kさん、「ネイチャー・センター、どうでしたか?」

Fさん感動をこめて「いやあ、見た時はびっくりしましたノ……」(皆、次に「りっぱですなあ」などの台詞を予想。)Fさん、おもむろに――

「てっきり焼けたのかと思いました。」

一瞬の沈黙の後、一同、爆笑。

〔記録された鳥〕 アオサギ コブハクチョウ オオハクチョウ マガモ カルガモ ヨシガモ ヒドリガモ オナガガモ ハシビロガモ ホオジロガモ ミコアイサ カワアイサ トビ チュウヒ カモメ コゲラ ハシブトガラ シジュウカラ スズメ ハシボソガラス ガン S.P. (21種) 解散後 ウミアイサ アカゲラ オオアカゲラ ハヤブサ S.P.

〔参加者〕 西川喜久世 綿谷琴音 大坊幸七 米山露子 早瀬広司・富 吉田京子 天童雅俊 長岡宏幸・範子・滋雄・ゆりこ 野々村 菊 古館泰行 吉田庄平 青木二郎 白沢昌彦・瑠美子 武田怜子 渡辺紀久雄 山本篤子 西村辰夫 五十川祐弘 柳沢信雄・千代子 岩泉ゆう子 野口正男 萩 千賀 新田順子 房川比呂志 北尾 諭・久美子 横田通典 (33名)

〔担当幹事〕 早瀬広司 北尾 諭

☎064 札幌市中央区北1条西23丁目

小樽港

56. 12. 13 10:00~13:00

房川比呂志

探鳥会は愉快だ。ワイワイガヤガヤやりながらも老若男女、ベテラン、初心者問わず野鳥の観察という点で目的が一致するからだ。さらにバードウォッチャー同志、気軽に話が来て直ぐ友達になれるのが良い。誰でも鳥を追い駆ける真剣な眼差しには、子供の眼と同じ純真さが光っている。

探鳥会参加2回目の私にとって、今回面白いなと思ったことは、頭に名称のついていない「カモメ」のことを便宜的に「普通のカモメ」とか「ただのカモメ」と呼んでいたことである。図鑑で調べるとスズメも同様に「普通のスズメ」が存在している。ただ「普通のカラス」や「ただのハト」はいないようで、どれも“ハシブト”ガラスとか“アオ”バトなどと頭に名称がついている。何故カモメ、スズメには頭に名称のつかない普通の種類が存在するのか。人間社会でも〇〇会社の誰某とか××の人とか所属している所の名称を頭につけて呼んでいる場合がある。また、役職や肩書をつけて言うこともある。一方で、私のように全く頭に肩書のつかない「ただの人」もいるのである。そういう意味において今回、識別上、言われていた「ただのカモメ」に非常に親しみを感じました。ただ今回の目玉であったカモメ科の中で「普通のカモメ」は頭に名称がつかない悲しさ故か、単なる偶然

かどうか分かりませんが、最初の鳥合わせ(その日見た鳥の名前の確認)で漏れてしまい後から「ただのカモメもいましたよ!」の声でやっと追加され、鳥の社会においても肩書がものをいうのかなと一瞬思ったものでした。ヒラのカモメじゃ可愛そう。フジ三太郎の発想で「カチョウカモメ」とでも呼んでみてはいかがでしょうか。鳥の名称は人間が勝手につけたもので鳥達には全く分かりません。ただのカモメもオオセグロカモメも頭の名称の有無にかかわらず力一杯、荒涼とした冬の天空を羽ばたいていたのが印象的でした。

次回の探鳥会は是非とも晴れて欲しい。「房川さんの参加する時は何時も天気が悪いですね。ひょっとして雨男雪男では?」と言われ、ドキリ……。

最後になりましたが、今回は小樽市の会員の皆様には大変お世話になり有難うございました。この紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

〔記録された鳥〕 ハジロカイツブリ ウミウ ヒメウ クロガモ シノリガモ コオリガモ ホオジロガモ セグロカモメ オオセグロカモメ シロカモメ カモメ ウミネコ ミツユビカモメ ハクセキレイ スズメ ハシボソガラス ハシブトガラス (ドバト) (18種)

〔参加者〕 中野高明 渡辺俊夫 小嶋順子 野々村 菊

五十嵐優幸 柳沢信雄・千代子 梅木賢俊・翼 浦川昌雄 長岡ひろゆき・のりこ・しげお・ゆりこ 斎藤正彦 渡辺紀久雄 霜村耕介 飯山五玖子 新田順子 霜中愛子 伊藤玉枝 鍋島由次郎 富樫敏雄 北尾 諭・久美子 吹田長四郎 竹内喜代治 清野久子 浅沼佳代子

長谷川涼子 小町英子 細山麻枝 池田あき子 岩泉ゆう子 鎌田文子 中村道子 大和民承 吉田五市 亀尾紋十郎 (39名)

〔担当幹事〕 中野高明 渡辺俊夫 亀尾紋十郎

☎061-01 札幌市豊平区北野7条4丁目11の45

藤 の 沢

57.1.24 10:00~13:30

戸 津 高 保

円山の姉から、この日のことを聞き、家族など5人で、冬の探鳥会に初めて参加しました。

藤の沢・小鳥の村の村長さんである小沢さん宅に、10時集合。庭にはバード・テーブルがあり、トウキビヤリンゴ、脂身など野鳥のエサがいろいろ工夫して置かれていました。部屋に入って観察していると、ヒヨドリ、エゾアカゲラ、ミヤマカケスが雪をバックに次々と集って来たり、コガラ、シジュウカラなどが可愛らしい姿を見せてたりしました。

この日は道野鳥愛護会の新年会といったムードもあり、昼食には、ビールで少し顔を赤くしながら、用意されたブタ汁に舌つづみを打ち、(大変おいしかったですよ)、和気あいあいの感じで、参加者の自己紹介がありました。小沢さんの飾りっ気のない中にも、オシドリなど鳥達への愛情があふれるような話に、うなずいたり、笑ったり、人間の知恵で失なわれていく自然をとりもどそうという考えに共鳴したり。また平井先生の婦唱夫随論に妙なところで感心したり――。

食後には、平井・羽田さん等、世話人の方々が、苦心して用意された、鳥づくし(?)の福引があり、ユニークでユーモラスな解説と景品に皆さんで、楽しい時をすごしました。

私は札幌高校で生物を担当していて、出来るだけ、北海道の動・植物とその保護に関連した授業をしたいと考えています。この意味で、身近な野鳥に関しても、少しでも知識を増やしていこうと思い、今後の例会には、出来るだけ参加してみようと考えています。よろしくお願ひします。

〔記録された鳥〕 アカゲラ コゲラ ヒヨドリ ツグミ ハシブトガラ ヤマガラ シジュウカラ アトリ スズメ カケス ハシボソガラス ハシブトガラス (12種) 解散後 キジ

〔参加者〕 戸津高保・以知子・高明 陣内 直・寛・信 谷ロー芳・登志 菅原矩子 北尾 諭・久美子 榎本健二郎・久子 羽田恭子 平川次子 房川比呂志 平井秀松・さち子 船尾恭子 宮崎正美 井上元則 後藤芳彦 小沢広記 五十嵐孝一 西村辰夫 松原 茂・道泉屋宜志 池田正弘・綾子 野田真司・悦子 野々村 菊 曾根モト子 岩泉ゆう子 長谷川涼子 柳沢千代子・信雄 青木二郎 早瀬広司 横田通典 大坊幸七 武沢和義・佐知子 小堀煌治 林 大作 小山弘昭 (47名)

〔担当幹事〕 小沢広記 平井さち子

☎062 札幌市豊平区旭町2

新年懇談会報告

1月23日(土)、14:00~16:30、北海道婦人文化会館で、新年懇談会が、開かれました。

会は、野村梧郎幹事の司会で、出席者の自己紹介から始まり、野鳥情報や近況報告が話されました。

そして、井上会長のあいさつのおと、持ちよったスライドをみせていただきました。岩見沢から来られた船造淳一さんのヒグマ、トラフズク、ガン、山本一さんのチゴハヤブサ、庭に来る鳥、猪口卓さんのウトナイのシマアオジ、大麻・野幌の野鳥、武田勝利さんの不明シギなど、みな日頃の情熱が感じられる作品でした。

最後は、この日のゲストである、林大作さんのスラ

イドと、野鳥の写真を撮るときの餌付け法や写真技法についてのお話でした。3羽並んだカワセミのスライドを初め、みなため息の出るような作品でした。また、写真技法の話は、非常に勉強になりました。

例年以上に大勢集まり、盛会のうちに終わりました。

〔参加者〕 井上元則 石川普子 近藤はつえ 黒田聖子 羽田恭子 長岡宏幸・範子 岩泉ゆう子 霜村耕一 浅沼佳代子 山本とよ子 山本 一 大坊幸七 渡辺弘己 柳沢信雄・千代子 長谷川涼子 山崎カツエ 新宮康生 小山政弘 浪田良三 船尾恭子 さとう実 山本晃一 武田忠義 西村辰夫 後藤芳彦 北尾 諭 野村梧郎 清田吉晴 新田順子 渡辺紀久雄 早瀬広司 野々村 菊 平井さち子 猪口 卓 溝井茂 五十川祐弘 菅野寿衛吉 武田勝利 村野紀雄 工藤祐子 船造淳一 小川 巖 (44人) (渡辺記)



いよいよバードウォッチングには、最良のシーズンです。鳥達の美しい姿やさえずりを見たり聞いたり、ベテランもビギナーもぜひご参加下さい。

＜野幌森林公園＞

昭和57年5月9日 午前8時30分
国鉄大麻駅集合

＜植苗、ウトナイ湖＞

昭和57年6月6日 午前9時
国鉄千歳線植苗駅集合

＜福移＞

昭和57年7月4日 午前8時30分
札幌市営バス札苗線福移入口停留所集合

＜野幌森林公園を歩きましょう＞

上記の探鳥会のほか、次のような探鳥散歩を行います。どうぞご参加下さい。

5月23日、6月13日、7月18日

いずれも午前8時30分 国鉄大麻駅集合

● 探鳥会には観察用具（双眼鏡等）、筆記用具、昼食、雨具等をご持参下さい。

いずれも午後2～3時頃までに終了します。暴風雨以外は小雨決行致します。なお予定変更の場合は前もってお知らせ致します。



◆昭和57年度の総会について

昭和57年度の総会を次のとおり開催いたします。会員の皆様のご出席をお願いいたします。

- 1 とき 昭和57年4月17日（土）午後2時から
- 2 ところ 北海道婦人文化会館（札幌市中央区北1条西7丁目 電話（011）251-6329）
- 3 議題 昭和56年度事業報告
昭和56年度会計報告
昭和57年度事業計画
昭和57年度収支予算
役員改選 その他

◆郵便振替の口座番号変更のお知らせ

郵便振替事務の機械化に伴い、口座番号が改定されました。新しい口座番号は、小樽 1-18287 です。会費の納入は、新しい口座番号をご使用ください。

◆寄贈文献

昭和56年度中に、次の文献の寄贈を受けておりますので、閲覧をご希望の方は、本会事務局で、ご利用ください。

- 釧路市立郷土博物館報 No.269～272（釧路市立郷土博物館）
- 干潟を守る No.33～34（千葉の干潟を守る会）
- 私たちの自然 No.233～244（日本鳥類保護連盟）
- ふれあい 創刊号（釧路市動物園）
- 野鳥ニュース（白老町立飛生小学校）
- 野鳥愛護会だより No.10、鳥類の生息分布調査事業報告書（山形県野鳥愛護会）
- 野鳥さいたま No.31～42（日本野鳥の会埼玉県支部報）
- 博物館のひろば No.9～11、知床博物館研究報告第3集、所蔵資料目録-1、知床博物館展示解説書、知床の野鳥観察（斜里町立知床博物館）
- 初烈風切 No.5（日本野鳥の会弘前支部）
- コタンクルカムイ No.1～2（道央野鳥の会）

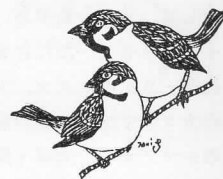
〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

雪どけが確実に進み、ガン・カモの北帰行を見たり、夏鳥の渡来を心待ちにしていることと思います。

45・46号の島田さん、猿子さんと同様、初めて編集を担当しました。今回は、浜頓別・羽幌・大沼公園と、道内各地から原稿をいただきました。会の名前どおり、北海道全域からの記事をと考えているので、ありがたく思っています。

発送が4月になりましたが、これが、56年度の最後の号です。56年度は、新入会員は64人。この輪をもっとふやしたいですね。

仕事の都合や遠隔地という理由で、探鳥会に参加できない方のためにも、野鳥だよりの発行に力をいれていきたいと思っておりますので、よろしく。（渡辺）



〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,500円（会計年度4月より） 郵便振替 小樽 1-18287
〒060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎（011）251-5465